二松学舎の陽明学

――山田方谷・三島毅・三島復・山田準――

吉田公平

日本の大学の内、所謂独立行政法人・国立大学は特定の宗教を建学の精神に置かない。特定の宗教を建学の精神にして設立運営されているのは私立大学だけである。その内、所謂ミッションスクールと呼称されるキリスト教系大学及び宗門大学と呼称される仏教系大学及び神道系大学がある。儒教は宗教であるか否か、議論の分かれるところであろうが、儒教を建学の精神にしている大学は大韓民国ソウルにある成均館大学が唯一であろうか。

今、問題にしている二松学舎大学は宗門大学ではないのだが、建学者の思想を尊重して儒教の中の一学派である陽明学を一つの看板にしている、その意味では旗幟鮮明な大学である。

東洋大学を創設した井上圓了はもと浄土真宗の出自であるが宗門から離れて哲学館を開学した。井上圓了は「諸学の基礎は哲学に在り」とみて「哲学」を学館の名称にした。その故にか東洋大学は「哲学」を重視する大学であるといわれることがある。建学の精神を現代社会の中で再構築することは私学の旗幟を鮮明にする上でも肝要なことである。

二松学舎大学は、儒教、それも陽明学を重視して陽明学研究所を設立し、機関誌『陽明学』を公刊してきた。この『陽

明学』は二松学舎大学の特色を国際的に宣言する学術誌として、国内はもとより、海外においてこそ注視されてきた。しばしば陽明学に関する企画を立案開催し、出版物を多数公刊してきたことは周知のことである。陽明学研究所、『陽明学』が面貌を一新して再出発するという。激動する現代社会にあって大学のありかたを根底から再考することが要請されている折から、この機会を積極的に捉えて、将来への展望を開く一つの基地になるような成果が産出されることを切に期待したい。

永らく陽明学の研究に従事してきたので、二松学舎の先学には格別の親しみを懐いている。創設者の三島中洲、その先生であった山田方谷、三島中洲の嗣子であり二松学舎の学長を務めた三島雷堂、山田方谷の嗣孫であり二松学舎の学長を務めた山田済齋。二松学舎の陽明学、陽明学の二松学舎を考えるとき、すぐさま思い浮かぶのはこの四人である。

この四人の生涯と教育、学術思想の全体像について理解しようとするとき、根本史料として我々が手にすることのできるのは山田準が編輯刊行した山田方谷の『方谷全集』のみである。三島中洲、三島雷堂、山田済齋については、例えば『陽明学』第八号「山田準特集号」のように企画されてはきた。そこに収められた諸論考は斯学界に裨益すること大きいものがあったことは疑問の余地はない。

とりわけ小林憲二氏の「山田済齋著述目録」は地味なお仕事ながら研究者にとっては大きな福音である。紙幅に余裕がなかったこともあったに違いない。初出掲載紙まで追求して一覧できる書誌を作製するのは、文字通り難事である。その意味ではこの種の調査に完璧を求めるのは鼻から無い物ねだりである。とはいうものの、この作業を手抜きしては、基礎作業が進まない。迂遠と思われる向きもあるかもしれないが、それぞれが気が付いた限りで、時間と労力の及ぶ範囲で、作業を遂行することにより、基礎情報を共有する道を模索するしかあるまい。わたし自身の本領は、所謂陽明学者たちの

哲学遺産である心性論を解析することにあると自負している。そのことに専念したいのであるが、その哲学遺産が発表された時期や場所を確認しないままに、単に文面上の所謂理論を解析しようとすると、その一文が発表されたときに、実はその著者が状況を配慮しながら慎重に措辞していることを閑却したままに、飛んでる理解をしてしまうことになりかねない。書誌研究をないがしろにすると、その一文をあくまでもその状況に投げ込んで理解することが肝腎であることを忘れてしまいがちである。書誌研究をしさえすればその危険から全面的に開放されるわけでもないが、その一手段にはなる。一手段ながら、それは有力な手段なのである。

本稿では、二松学舎の陽明学者たちの陽明学理解そのものの特色を直接に検討するまでには至っていない。そのずつと手前に位置する書誌研究の一部である。調査すべき文献は極めて多方面に亘るのだが、これまで充分には調査されてこなかった分野の調査報告をすることにする。

日本で陽明学が最も大きな思想運動を展開したのは、明治時代の後半期から昭和初期である。江戸時代の運動量はこの時期に比較するならば、ずっと小さい。それなのにその運動がありのままに理解されてこなかったのは、これまでの思想史研究が歴史主義に呪縛されていたからである。硬直した進歩史観に禍されて儒教思想を信条とした思想運動団体は鼻から研究する価値はないと決め付けられた所為である。しかし、事実としてそれを原理としていきた人々が存在したことを消すことはできない。そしてその彼らが無意義なことを信条としたのだとも一概にはいえまい。今の我々とは異なる国政に生きた人々であるから、彼らの言説に違和感を覚える側面があることはいかにも否定できない。しかし、それを斟酌してもなお、彼らが陽明学を信条としたということそのこと自体を、やはり検討することが、この際、緊要なのではないのか。

それが今日的な意義があると性急にいうつもりはない。しかし、性善説の原理主義ともいえる陽明学が生活哲学として生きられたということは、やはり銘記せざるをえまい。ある哲学が一群の人々によって臨床哲学として生きられ活学されるということは、国政上の差異を越えて、価値を持つことを証言していることにならないか。

個別的に特定の陽明学者の学業がいかなる価値を持つのかという問題ではない。そうではなくして彼らが信奉した、性善説を基本的人間観の中核に据えた臨床倫理学そのものの意味を問いたいのである。それを抽象的に問うのではなくして、歴史上に実在した、固有名詞を持った人々の営為の場に検証してみたいのである。

一口に陽明学徒といっても、一人一人は固有の状況に制約されて生きるしかないから、一般論として語ることは、さして意味はない。あくまでも個々の一人一人に注視して考察するしかない。そのためにも個々の「陽明学者」に拘った書誌学が基礎作業として必須なのである。実際の歴史事象は多面的であり複雑である。それを「ありのままに」理解することは不可能である。それを承知の上で実相に迫る努力をしてみたい。その一里塚が書誌調査である。その書誌調査のさらなる一里塚が、本稿の調査報告である。

本稿が調査したのは以下の五紙である。

吉本鉄華主幹『陽明学』（東京・鉄華書院）（木耳社の影印版がある）

東正堂主幹『王学雑誌』（東京・明善学社）（文言社の影印版がある）

東正堂主幹『陽明学』（東京・陽明学会）

石崎東国主幹『陽明』（大阪・大阪陽明学会）

石崎東国主幹『陽明主義』（大阪・大阪陽明学会）

吉本鉄華・東正堂・石崎東国は近代日本における陽明学運動の三傑である。彼らが主管した機関誌の特色、論調など、興味は尽きないが、それもこれも将来の課題として、ここでは各機関誌に掲載された山田方谷・三島中洲・三島雷堂・山田済齋の論説・漢詩文の目録を示すことにする。

○吉本襄主幹『陽明学』（鉄華書院）

大学古典科卒業・山田準述「王学一斑」。吉本『陽明学』1号13―18頁。明治29年7月5日。

山田方谷球五郎「読陽明集」。吉本『陽明学』1号46頁。明治29年7月5日。

山田方谷球五郎「論学蔽賦似諸生」。吉本『陽明学』1号46頁。明治29年7月5日。

史伝「山田方谷客の問に答ふ」。吉本『陽明学』1号47頁。明治29年7月5日。

東宮侍講三島毅「崇神論」。吉本『陽明学』2号7―15頁。明治29年7月20日。

大学古典科卒業山田準「王学一斑」。吉本『陽明学』2号15―17頁。明治29年7月20日。

山田方谷球「庭前小渠汗穢已久。一日諸生渫治之。環石湛水成池形。有隣叟来観云云。賦此以答其言」。吉本『陽明学』2号39頁。明治29年7月20日。

山田方谷球「七月既望。横屋君迎余泛於西渓。酔中走筆。賦七言古風一篇。以呈」。吉本『陽明学』2号39頁。明治29年7月20日。

三島毅「丙申春日拝東宮侍読之命。賦此告方谷先師霊」。吉本『陽明学』2号39―40頁。明治29年7月20日。

東宮侍講三島毅述「王子四句訣」。吉本『陽明学』3号9―11頁。明治29年8月5日。

山田準述「王学一斑」。吉本『陽明学』3号15—18頁。明治29年8月5日。
東宮侍講三島毅「王子四句訣」。吉本『陽明学』4号8—11頁。明治29年9月5日。
山田準述「王学一斑」。吉本『陽明学』5号8—12頁。明治29年9月20日。
史伝「山田方谷袴を広げる癖あり」。吉本『陽明学』5号42頁。明治29年9月20日。
山田準述「王学一斑」。吉本『陽明学』6号7—9頁。明治29年10月5日。
山田済齋、明治29年7月既望に大野雲潭、小泉・市川・川上・本城・安西と日光に旅行する。（大野雲潭「遊晃記」。）吉本『陽明学』6号32—34頁。明治29年10月5日。
方谷山田球述、門人筆記、孫山田準校訂「古本大学講義」。吉本『陽明学』6号1—4頁。明治29年10月5日。
広告「方谷遺稿」（川田甕江序文三島中洲編纂）。吉本『陽明学』6号裏表紙。明治29年10月5日。
山田準述「王学一斑」。吉本『陽明学』7号7—10頁。明治29年10月20日。
山田方谷「古本大学講義」。吉本『陽明学』7号5—8頁。明治29年10月20日。
山田準述「王学一斑」。吉本『陽明学』8号6—9頁。明治29年11月5日。
山田方谷「古本大学講義」。吉本『陽明学』8号9—12頁。明治29年11月5日。
広告「栴檀」（栴檀社）に三島中洲・山田方谷・山田準の詩文。吉本『陽明学』8号。明治29年11月5日。
広告「方谷遺稿売切御注文に応じ難く候鉄華書院」。吉本『陽明学』8号。29年11月5日。
広告『覚の道』四号（布教学館仮事務所）五号に井上圓了投稿豫定。吉本『陽明学』8号。29年11月5日。
三島中洲「仁斎学の話（学士院会演説）」。吉本『陽明学』9号3—6頁。明治29年11月20日。

山田方谷「古本大学講義」。吉本『陽明学』9号13―16頁。明治29年11月20日。
広告「方谷遺稿再版」鉄華書院。吉本『陽明学』10号目次の下段。明治29年11月8日。
山田方谷「古本大学講義」。吉本『陽明学』10号17―20頁。明治29年11月8日。
山田準述「王学一斑」。吉本『陽明学』11号6―8頁。明治29年12月20日。
先哲逸話「山田方谷の没時」（新屋稼堂『儒林逸話』）吉本『陽明学』11号30頁。明治29年12月20日。
山田方谷述山田準校「古本大学講義」。吉本『陽明学』11号21―24頁。明治29年12月20日。
山田方谷「古本大学講義」。吉本『陽明学』12号25―28頁。明治30年1月5日。
山田方谷「古本大学講義」。吉本『陽明学』14号29―32頁。明治30年1月7日。
山田方谷「古本大学講義」。吉本『陽明学』16号33―36頁。明治30年3月5日。
広告「次号より山田方谷三島中洲先生の批評に係る熊沢蕃山先生一代の大著集義和書鈔を掲載し始む。」。吉本『陽明学』18号目次の下。明治30年4月5日。
山田方谷「古本大学講義」。吉本『陽明学』19号37―42頁。明治30年4月20日。
山田方谷「古本大学講義」。吉本『陽明学』27号43―46頁。明治30年7月25日。
山田方谷「古本大学講義」。吉本『陽明学』28号47―48頁。明治30年7月30日。
山田方谷講演神田一郎筆記「焚書論」。吉本『陽明学』35号4―6頁。明治30年10月6日。
春日白水「書方谷遺稿後」山田済齋云。吉本『陽明学』35号7頁。明治30年10月6日。
柳井絅齋「山田方谷附河井継之助が事」（もと『太陽』掲載の転載）。吉本『陽明学』36号9―13頁。明治30年10月24日。

王学三大家。（春日潜庵・池田草庵・山田方谷）。吉本『陽明学』38号5頁。明治30年12月5日。

○東正堂主幹『王学雑誌』（明善学社）

文学博士三島毅「同体異用」（王学会演説大意）。『王学雑誌』1巻3号。1—4頁。明治39年5月15日。

硯海餘嫡「方谷年譜」（明善学社社員山田準手編）。『王学雑誌』1巻4号4—5頁。明治39年6月15日。

文学士三島復「王学の六主義」。『王学雑誌』1巻7号5—6頁。明治39年9月15日。

文学士三島復「王学の六主義」。『王学雑誌』1巻8号9—10頁。明治39年10月15日。

文学士三島復「山田方谷と春日潜庵」。『王学雑誌』1巻11号1—5頁。明治40年1月15日。

社告「一金五十銭。三島復君」寄附。『王学雑誌』1巻11号巻末。明治40年1月15日。

山田準「儒教の根本義」。『王学雑誌』2巻3号1—8頁。明治40年5月15日。

文学士三島復「熊沢蕃山と山田方谷」。『王学雑誌』2巻7号3—8頁。明治40年9月15日。

山田済斎「戊申歳首在薩南温泉偶成」「戊申新春所感其一」「戊申新春所感其二」。『王学雑誌』3巻1号文苑1頁。明治41年3月15日。

吉村彰識「方谷先生逸詩」。『王学雑誌』3巻2号1—2頁。明治41年4月15日。

雑報「山田準・薩摩王学会創始」。『王学雑誌』3巻7号5頁。明治41年10月3日。

○東正堂主幹『陽明学』（陽明学会）

文学博士三島中洲「中江藤樹伊藤仁斎両先生」。『陽明学』1号8—20頁。明治41年11月3日。

済斎山田準「秋懐二律」。『陽明学』1号55頁。明治41年11月3日。

中洲三島毅「梅山遺稿序」。『陽明学』3号52頁。明治42年1月1日。
八十翁中洲三島毅「己酉元旦」。『陽明学』3号53頁。明治42年1月1日。
鹿児島地方の活況（山田準）。『陽明学』3号59頁。明治42年1月1日。
文学博士三島中洲「陽明学一夕話」。『陽明学』4号1頁。明治42年2月1日。
山田準「王学管見（一）」。『陽明学』4号8—10頁。明治42年2月1日。
中洲三島毅「書孟子養気章或問図解後」。『陽明学』4号52頁。明治42年2月1日。
鹿児島王学会略則（山田準）。『陽明学』4号61—62頁。明治42年2月1日。
山田準「王学管見（二）」。『陽明学』5号3—6頁。明治42年3月1日。
文学士三島復「與らざるの記」。『陽明学』5号6—9頁。明治42年3月1日。
文学士三島復講演「陸王風の性格」。『陽明学』5号43頁「本会記事」。明治42年3月1日。
第七高等学校教授山田準「王学管見」。『陽明学』7号8—10頁。明治42年5月1日。
文学士三島復「山田方谷先生の教育」。『陽明学』7号11—14頁。明治42年5月1日。
文学士三島復「山田方谷先生の教育」。『陽明学』8号11—13頁。明治42年6月1日。
小野藤太「鹿児島王学会」（山田準）。『陽明学』8号37頁。明治42年6月1日。
文学士三島復「陸象山の学風」。『陽明学』9号9—12頁。明治42年7月1日。
文学士三島復「陸象山の学風」。『陽明学』10号13—14頁。明治42年8月1日。
文学士三島復「山田方谷と塩谷宕陰との関係」。『陽明学』11号11—14頁。明治42年9月1日。

綴込広告「山田方谷先生遺著『方谷遺稿』三冊定価金八十銭送料不要」「山田方谷先生が我が陽明学者中の錚錚たる偉男児たることは世人の皆知る所本書はその遺著文二巻凡六十篇詩一巻凡二百五十首を収め佐藤一齋塩谷宕陰等諸家の評語を附する者あり陽明学を攻究する者の必ず座右に備へて参考に供すべき良書なり希望の者は右王学会に申込まるべし」「東京市麹町区一番町四十五番地王学会」。『陽明学』11号。明治42年9月1日。

第七高等学校教授山田準「王学管見」。『陽明学』12号4—9頁。明治42年10月1日。

文学士三島復「山田方谷先生の学説」。『陽明学』12号9—11頁。明治42年10月1日。

済齋山田準「家祖父方谷翁三十三回忌辰賦代蘋蘩」「客中夜座」。『陽明学』12号34頁。明治42年10月1日。

文学士三島復「山田方谷先生の学説」。『陽明学』13号10—11頁。明治42年11月1日。

三島復「山田方谷先生の学説」。『陽明学』14号12—15頁。明治42年12月1日。

八十耄叟三島毅「小川氏に對する挨拶」。『陽明学』14号36頁。明治42年12月1日。

後学三島毅「藤川冬齋先生遺文読静寄軒集拝識」。『陽明学』14号3頁。明治42年12月1日。

三島復「山田方谷先生の学説」。『陽明学』15号10—12頁。明治43年1月1日。

三島毅講演「気生理説」。明治42年12月12日月次会。『陽明学』15号38頁「本会記事」。明治43年1月1日。

文学士三島復「山田方谷先生の学説」。『陽明学』16号9—13頁。明治43年2月1日。

山田済齋「己酉秋講孝経于造士館既畢賦此示学徒且自勗」。『陽明学』16号37頁。明治43年2月1日。

文学士三島復「山田方谷先生の学説」。『陽明学』17号10—12頁。明治43年3月1日。

済齋山田準「送花田太孺人葬有感賦孝子松蔭君」。『陽明学』17号39頁。明治43年3月1日。

文学士三島復「山田方谷先生の学説」。『陽明学』18号17―19頁。明治43年4月1日。
文学士三島復「山田方谷先生の学説」。『陽明学』20号22―25頁。明治43年6月1日。
文学博士三島毅「気生理の説」。『陽明学』21号4―11頁。明治43年7月1日。
済齋学人「山田方谷尊王事蹟略」。『陽明学』21号41―45頁。明治43年7月1日。
賛成会員陸義猶「読三島先生演説気生理之論敢攅攄卑見并請示教」。『陽明学』23号34―36頁。明治43年9月1日。
三島毅「静区先生五十年祭」。『陽明学』24号31頁。明治43年10月1日。
折込広告「文学士三島復著新刊『哲人山田方谷』正価金一円二十五銭送料金十二銭附録陽明学講話陽明学会員に限り特価金一円」「藤田東湖の人物に学問を加へたる者なりと塩谷宕陰の評したる幕末の俊傑山田方谷の学術事業、人之を詳にする者少きは豈盛代の恨事にあらずや、著者方谷の学流を酌み研究年あり其陽明学に於ける造詣を明にし、併せて萬世に朽ちざるべき其性行と事蹟とを世に紹介せんとす、此書ただに以て陽明学の蘊を窺ふべきのみならず、以て人格の修養に資すべく、以て幕末の形勢を察すべし、且つ著者の附載したる陽明学講話は、青年学生の修養に尤も適切なる指針なり」「発行所東京都神田区裏神保町五振替口座東京三七二一文華堂書店」。『陽明学』24号。明治43年10月1日。
山田済齋「庚戌夏帰郷里高梁、郷友要余泛舟梁渓、舟中有作、二首」。『陽明学』26号40頁。明治43年12月1日。
鹿児島王学会（山田準主宰）。『陽明学』26号51頁「雑報」。明治43年12月1日。
文学博士三島毅「理気論篇」。『陽明学』27号31―36頁。明治44年1月1日。
山田方谷先生贈位祝賀会（三島毅二絶。山田準・山田璋謝辞）。『陽明学』27号49頁。明治44年1月1日。

山田準「観念論と王学」。『陽明学』28号6—9頁。明治44年2月1日。
山田準（投）「栗栖天山手簡」。『陽明学』28号49頁。明治44年2月1日。
鹿児島王学会の方谷先生贈位記念祭典（山田準）。『陽明学』28号50頁。明治44年2月1日。
寄贈書。三島復『哲人山田方谷』。『陽明学』28号51頁。明治44年2月1日。
山田準「薩藩王学者伊東猛右衛門翁」。『陽明学』29号22—27頁。明治44年3月1日。
賛成会員陸義猶「謝三島先生教賜」。『陽明学』29号43—45頁。明治44年3月1日。
（故）山田方谷「病中書懐恭上我公三首」。『陽明学』31号44頁。明治44年5月1日。
寄贈新刊『中洲文稿第三集』博文館発行。『陽明学』32号46頁。明治44年6月1日。
（故）柳井絅齋「山田方谷」。『陽明学』33号17—20頁。明治44年7月1日。
山田準「王龍溪と査毅齋の臨終」。『陽明学』35号7—9頁。明治44年9月1日。
山田済齋「辛亥四月六日祭祖考方谷先生霊申告昨秋贈位恩命繪威厳」。『陽明学』35号31頁。明治44年9月1日。
山田済齋「壽中村鷲蜂先生八秩先生我旧高梁藩宿儒門下頗衆」。『陽明学』37号35頁。明治44年11月1日。
三島中洲評「大野雲潭『学弊歌并引』」。『陽明学』38号。明治44年12月1日。
大野雲潭述三島中洲評点「孟子論」。『陽明学』41号30—32頁。明治45年3月1日。
三島中洲「読劉子全書」。『陽明学』44号43頁。明治45年6月1日。
（故）山田方谷先生著孫山田準投稿「続通鑑綱目餘論」。『陽明学』45号10—13頁。明治45年7月1日。
（故）山田方谷先生著孫山田準投稿「続通鑑綱目餘論」。『陽明学』46号18—23頁。大正元年8月1日。

大野雲潭三島中洲批評「孔釈合一説」。『陽明学』46号31—32頁。大正元年8月1日。

（故）山田方谷先生著孫山田準投稿「続通鑑綱目」。『陽明学』47号25—30頁。大正元年9月1日。

山田済齋「澤潟先生贈位奉告祭遙賦奠」「城山矚目」「城山呦々会席上率賦」。『陽明学』47号34頁。大正元年9月1日。

三島毅「金子得處翁墓誌銘」。『陽明学』48号17—19頁。大正元年10月1日。

文学博士三島毅「陽明学研究の心得」。『陽明学』49号7—14頁。大正元年11月1日。

山田準「贈孝子三島文学士」。『陽明学』53号25頁。大正2年3月1日。

山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』53号1—6頁。大正2年3月1日。

山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』54号7—10頁。大正2年4月1日。

山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』55号11—12頁。大正2年5月1日。

三島復「王陽明の信心」。『陽明学』56号18—20頁。大正2年6月1日。

山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』56号13—14頁。大正2年6月1日。

山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』57号15—16頁。大正2年7月1日。

山田準「良知の意義」。『陽明学』58号13—19頁。大正2年8月1日。

三島中洲「明治三十三年山本信哉得熊沢蕃山遺髪於大江俊光、記故紙中珍蔵之。頃備前閑谷黌受譲以宝蔵焉。蓋往古備藩学政隆盛、蕃山與有力焉。遺髪眞得其所矣。余嘉信哉割愛美挙、賦此以贈。（三首）」。『陽明学』58号34頁。大正2年8月1日。

山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』58号17—18頁。大正2年8月1日。

山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』59号19—26頁。大正2年9月1日。
山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』60号27—36頁。大正2年10月1日。
山田済齋寄贈「烏々歌」（宋楽雷発作）。『陽明学』61号20頁。大正2年12月1日。
山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』61号37—38頁。大正2年11月1日。
山田済齋「赴肥後鹿本郡報徳会巡講有作」「似同行花田仲佐」「旧友三宅少佐献其新著勤倹尚武論于先師荘田霜渓先生霊。先生令嗣翼齋君有詩。次韻寄懐」「講楽氏烏々歌于王学会。我乃木大将所愛誦也。賦似同人」。『陽明学』62号23頁。大正2年12月1日。
山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』62号39—40頁。大正2年12月1日。
山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』63号41—46頁。大正3年1月1日。
山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』64号47—54頁。大正3年2月1日。
口絵「山田方谷先生肖像」。『陽明学』65号。大正3年3月1日。
社説「山田方谷先生の学に就て」。『陽明学』65号1—5頁。大正3年3月1日。
山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』65号55—58頁。大正3年3月1日。
三島中洲「読大江天也老師得度詩。欽服之餘。次韻。」。『陽明学』66号21頁。大正3年4月1日。
山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』66号59—60頁。大正3年4月1日。
山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』67号61—66頁。大正3年5月1日。
（文学博士）三島毅「鳴山高井翁碑」。『陽明学』68号17—18頁。大正3年6月1日。

鹿児島王学会通信。『陽明学』68号25頁。大正3年6月1日。
山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』68号67―78頁。大正3年6月1日。
鹿児島王学会大会開催予告。『陽明学』69号28頁。大正3年7月1日。
山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』69号79―82頁。大正3年7月1日。
三島中洲毅「明治三十三年。・・・。(『陽明学』58号34頁掲載三首)」「賀岡村閑翁八十八」。『陽明学』70号17―18頁。大正3年8月1日。
山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』70号83―90頁。大正3年8月1日。
鹿児島王学会主催陽明学研究会次第。「八月一日。山田準演題。西郷南洲と東澤潟・東澤潟の教育法及逸事。」「八月二日。山田準演題。陽明学の体段・鹿児島の陽明学。」「八月三日。山田準演題。(予備)」。東澤潟鹿児島滞在中に同游して漢詩の応酬。『陽明学』71号25―32頁掲載東澤潟「遊踪略記」記載。大正3年9月1日。
山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』71号91―94頁。大正3年9月1日。
山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』72号95―104頁。大正3年10月1日。
山田済齋「鹿児島陽明学研究会講話開会の辞(王学会主催)」。『陽明学』73号1―2頁。大正3年11月1日。
山田済齋「東澤潟と西郷南洲(一)(八月一日鹿児島陽明学研究講話第一席会員鵜木岩助筆記)」『陽明学』73号2―5頁。大正3年11月1日。
(故)山田方谷先生遺文「楠公七生伝序」。『陽明学』73号19頁。大正3年11月1日。
山田準「寄東正堂君。憶澤潟先生也。」。『陽明学』73号21頁。大正3年11月1日。

山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』73号105―108頁。大正3年11月1日。

山田済齋「東澤潟と西郷南洲（二）（八月一日鹿児島陽明学研究会講話第二席鵜木氏筆記）」。『陽明学』74号6―8頁。大正3年12月1日。

山田済齋「東澤潟の教育法及逸話（三）（同上第三席）」。『陽明学』74号8―9頁。大正12月1日。

山田方谷先生述門人筆記「古本大学講義」。『陽明学』74号107―112頁。大正3年12月1日。

山田済齋「鹿児島の陽明学（八月二日鹿児島陽明学研究会講話第四席鵜木氏筆記）」。『陽明学』75号9―13頁。大正4年1月1日。

山田済齋「薩摩陽明学者なる松山隆阿彌」。『陽明学』75号24―28頁。大正4年1月1日。

山田済齋「陽明学の体段（八月三日鹿児島陽明学研究会講話筆記、もと前号に入るべき筈なるも誤つて脱漏せるに付、追て掲す）」。『陽明学』76号5―6頁。大正4年2月1日。

三島毅「王文成公銅像記」。『陽明学』77号18頁。大正4年3月1日。

山田準「正誤」。『陽明学』77号23頁。大正4年3月1日。

三島中洲「読大江天也老師得度詩。欽服之餘。次韻以贈。五首之二。」。『陽明学』79号18頁。大正4年5月1日。

山田方谷「方谷翁遺音（山村春事・詠中興諸将六首・富岡寓中作・咏松・遊閑谷二首）」（本書村上作夫氏遺筐に在るものを会員中島壽氏が写し寄稿せしものなり今刊行本方谷遺稿中に漏れたるもののみを採録す批点は蓋し村上氏の加へしものに似たれば其儘に存す）。『陽明学』81号13頁。大正4年7月1日。

山田方谷「方谷遺言文二篇（示諸生・雑説）」（即ち山田方谷翁の遺篇にして村上作夫氏の遺筐中にあるもの前号の続）。『陽明学』

82号22―23頁。大正4年8月1日。

（故）山田方谷「雑感」（右幕末の作。感時触興。事皆有当。読者或知之。上木遺稿逸之。今借陽明誌公之云。嗣孫準識）。『陽明学』84号21頁。大正4年10月1日。

山田準「国民道徳と信念」。『陽明学』89号2―6頁。大正5年3月1日。

山田済齋「丙辰歳旦（二首）」。『陽明学』89号23頁。大正5年3月1日。

山田済齋抄寄（故）新納時升「呈巖国橘仙和尚書」。『陽明学』91号24―25頁。大正5年5月1日。

山田済齋「新納時升小伝」。『陽明学』91号25―26頁。大正5年5月1日。

山田準「池田草庵先生贈位祭賦奠」。『陽明学』92号22頁。大正5年6月1日。

三島中洲「軽雲外山君墓碣銘」（同学友人宮中顧問官従三位勲一等文学博士三島毅撰（時歳八十有七））。『陽明学』94号14頁。大正5年8月1日。

山田済齋準「廣谷庚齋翁続余国民道徳論賜玉什次韻以謝之」。『陽明学』94号17頁。大正5年8月1日。

山田済齋準抄寄「老梅年譜抄」（年譜は元来鹿児島福昌寺住持無参の年譜にして、門弟記述に係るものなるも予は其原本を見るに及ばず而して大久保甲東伝に出るものより抄出す）。『陽明学』94号18頁。大正5年8月1日。

三島中洲「文法百則跋」。『陽明学』95号24頁。大正5年9月1日。

廣谷庚齋「山田済齋学壇。在薩城。執教鞭。有年于茲。糾合志士起学会。当東京正堂道兄呼応。訓練甚矣。予曾読其国民道徳論歌論旨有渕源。短篇以寄之。而今辱貴酬。更畳前韻。表微衷」。『陽明学』96号24頁。大正5年11月1日。

山田準述「言志録釈義」。『陽明学』97号13―15頁。大正5年12月1日。

方谷先生嗣孫山田準述「言志録釈義」。『陽明学』98号5―6頁。大正6年1月1日。
山田準述「言志録釈義」。『陽明学』99号9―10頁。大正6年2月1日。
山田準述「言志録釈義」。『陽明学』100号8―9頁。大正6年3月1日。
山田準述「言志録釈義」。『陽明学』101号11―12頁。大正6年4月1日。
山田準「雑誌陽明学一百号。寄主幹東君」。『陽明学』101号20頁。大正6年4月1日。
山田準述「言志録釈義」。『陽明学』104号12―13号。大正6年7月1日。
八十八叟三島中洲「自壽作」。『陽明学』104号24頁。大正6年7月1日。
宮内鹿川「次中洲三島翁自壽韻賀其八十八」。『陽明学』104号24頁。大正6年7月1日。
山田準述「言志録釈義」。『陽明学』106号15―18頁。大正6年10月1日。
貫齋小林正策「六月三日。二松学舎諸子胥謀。設其師中洲三島翁八十八壽讌。招延朝野名流。余亦與焉。賦七言四韵一章。以表祝意」。『陽明学』107号26―27頁。大正6年11月1日。
山田準述「言志録釈義」。『陽明学』108号21―22頁。大正6年12月1日。
(故)長梅外作会員三島復抄寄「王文成公」。『陽明学』108号31頁。大正6年12月1日。
山田済齋投稿「小山直方伝」。『陽明学』110号20頁。大正7年2月1日。
中村敬宇三島雷同抄寄「冬齋藤川君紀念碑」。『陽明学』111号25―26頁。大正7年3月1日。
山田準稿「推倒一世之智勇開拓万古之心胸―藤田東湖・吉田東洋・西郷南洲―」。『陽明学』112号31―32頁。大正7年4月1日。

山田準述「言志録釈義」。『陽明学』113号28―29頁。大正7年5月1日。

山田済齋投寄「耄夫論」（本篇は薩摩藩儒新納空翠（時升）翁が嫡家次郎四郎に贈りたるもの、藩中党蔽を知べき唯一の材料なり、耄夫論とは翁の題する所とす、空翠翁は慶応元年八十八歳没）。『陽明学』113号33―37頁。大正7年5月1日。

三島雷堂抄寄「書陽明立志後（藤堂高猷詢堯齋遺文）」。『陽明学』115号31頁。大正7年7月1日。

山田準述「言志録釈義」。『陽明学』117号17―19頁。大正7年10月1日。

三島中洲翁「進鴻渓先生伝」。『陽明学』117号19―21頁。大正7年10月1日。

山田済齋「澤潟大会東澤潟応酬詩」。『陽明学』117号26―28頁「游踪略記」所収。大正7年10月1日。

山田方谷先生木像真影。先生旧僕柴倉浅太郎氏刻之。嗣孫山田済齋君寄贈。『陽明学』118号巻首口絵。大正7年11月1日。

山田準述「言志録釈義」。『陽明学』118号14―16頁。大正7年11月1日。

山田済齋「今茲上京訪荘田翼齋于青山之寓。吹野聴雲先在。三人島門之旧。相得最親。杯酒縦談移時」「八月十三日所感。在岡山」。『陽明学』118号23頁。大正7年11月1日。

「山田方谷先生木像由来記」（口絵の説明）。『陽明学』118号35頁。大正7年11月1日。

山田済齋「戊午八月。迎正堂東君。為黄薇之遊。賦此。」。『陽明学』119号31頁。大正7年12月1日。

山田準「念台の片影」。『陽明学』120号6―8頁。大正8年1月1日。

山田準「新年書（所）感」。『陽明学』121号31頁。大正8年2月1日。

三島中洲「答人問」。『陽明学』122号27頁。大正8年3月1日。

済齋山田準「遙弔芳田清水広次翁。翁讃人。久住于東都。深慨世道不振。謂我大学欠東洋道義一科。是所以致今日頽勢。屡建議上下両院。屡不省。乃欲求同志于四方。提老躯。先跋渉東北之野。自四国渡鎮西。遂入薩。叩余門。贏然説旅途之苦。意気獨昂。恂々語志。余偉之。介于有志。周旋頗力。翁大喜。去経熊本。遊福岡。次入山口。遂無所遇。数日絶食。荒祠危坐俟死。官司大驚。護送之東京。歳餘翁遂逝。又数歳。官府漸慮徳教之急。創設修身科于東西両高師範校。又改大学令。標掲人格陶冶及国家思想涵養二大綱。翁志頗酬。而翁皆不及見也。不知何人掃墓苔以奠告焉。感愴之餘有此作。」「戊午歳抄與王学会諸子会于城山浩然亭。王子有語曰。人皆謂我有益於朋友。我自覚。我取朋友之益為多。余有感焉。賦此乞諸子之和。」『陽明学』122号27—28頁。大正8年3月1日。

山田準投寄新納空翠遺著「勉強説」。『陽明学』123号3—8頁。大正8年4月1日。

山田準「紀元節恭頌大憲宣布三十年」。『陽明学』123号31頁。大正8年4月1日。

山田準投寄（故）新納空翠遺著「勉強説」。『陽明学』124号3—6頁。大正8年5月1日。

山田準「贈葉梨漸庵東帰。漸庵我王学会中人。」「漸庵常陸之産。其来学于薩。実師花田松蔭」。『陽明学』125号23頁。大正8年6月1日。

三島毅自撰「三島毅碑銘」。『陽明学』126号28—29頁。大正8年7月1日。

山田準「鎌田柳泓の心苑餘材題言を読みて」。『陽明学』127号4—9頁。大正8年8月1日。

山田準「奉次東君弔旧僕津秋助太。且弔助太霊。」。『陽明学』128号25頁。大正8年10月1日。

山田済齋「咏方谷園移植藤樹」。『陽明学』129号20—21頁。大正8年11月1日。

三島毅原著三島雷堂抄「愚得録抄」。『陽明学』129号26—27頁。大正8年11月1日。

「山田先生の逸事、有森氏来翰中の一節」。『陽明学』129号27頁。大正8年11月1日。
山田準稿「宇都宮龍山と三橋肇」。『陽明学』129号27—30頁。大正8年11月1日。
山田準「寄懐閑翁岡村先生。先生棲大和駒山。肥遯五十年。年歯方九十三。寄書高瀬惺軒。促一遊聞鵑」「奉酬岡村先生」。『陽明学』130号20頁。大正8年12月1日。
三島毅原著三島復抄「愚得録抄」。『陽明学』130号27—28頁。大正8年12月1日。
山田方谷先生和書牘。『陽明学』130号28—29頁。大正8年12月1日。
山田準寄稿「祭中洲三島先生文」。『陽明学』131号30頁。大正9年1月1日。
三島毅原著三島復抄「愚得録抄」。『陽明学』131号35頁。大正9年1月1日。
三島中洲翁追悼会。鹿児島に於て。『陽明学』131号36頁。大正9年1月1日。
済齋山田準「庚申歳旦口占」「歳暮書感」。『陽明学』132号28—29頁。大正9年2月1日。
三島毅原著三島復抄「愚得録抄」。『陽明学』133号29頁。大正9年3月1日。
山田方谷先生真筆「松下孤亭図」(岡山県東三省翁珍蔵)。『陽明学』134号巻首口絵。大正9年4月1日。
山田済齋「悼閑翁岡村先生」。『陽明学』134号28頁。大正9年4月1日。
三島毅原著三島復抄「愚得録抄」。『陽明学』134号29—31頁。大正9年4月1日。
三島毅原著三島復抄「愚得録抄」。『陽明学』136号27—28頁。大正9年8月1日。
三島毅原著三島復抄「愚得録抄」。『陽明学』137号18—19頁。大正9年10月1日。
山田済齋「郷友柳井子徳(貴三)購宅東都本所坊。奉太孺人。庭有古藤株。友人西村明卿豫精通于赤穂之事。曰。是松

浦肥州公藤邸之址也。元禄復仇之夜。公在荘。聴兵鼓之声。卜知義士壮挙。誡子弟曰。赤穂侯有臣如是。汝曹宜倣焉愛撫家臣。事載松浦家記秘蹟。今其邸址帰子徳。天其有錫孝子乎。明卿因賦藤花餘影五首贈之。余亦有感。次韻倣顰」。『陽明学』137号23―24頁。大正9年11月1日。

三島毅原著三島復抄「愚得録抄」。『陽明学』137号25―26頁。大正9年11月1日。

山田済齋「湯潜庵と志学会」。『陽明学』139号5―9頁。大正10年1月1日。

山田済齋「先王父方谷翁長瀬里宅址碑成。賦此致謝。」「寄友人在大島」。『陽明学』139号21頁。大正10年1月1日。

三島毅原著三島復抄「愚得録抄」。『陽明学』139号21―24頁。大正10年1月1日。

山田済齋抄寄「支那民国通信」。『陽明学』139号24―26頁。大正10年1月1日。

三島毅原著三島復抄「愚得録抄」。『陽明学』140号26―29頁。大正10年2月1日。

三島復「陸子学譜に就て」。『陽明学』140号36―38頁。大正10年3月1日。

山田済齋「與旧友山本鴨東（英雄）遊鹿児島浄光明寺」。『陽明学』143号30頁。大正10年5月1日。

山田準「松本紀山来訪、紀山数航南洋」。『陽明学』146号28頁。大正10年8月1日。

三島復「陽明致良知訓の年代に就て」。『陽明学』146号29―30頁。大正10年8月1日。

中備故方谷山田球講述門人東備天岳岡本巍手録校訂「中庸講筵録」。『陽明学』148号11―17頁。大正10年12月1日。

山田済齋「高屋山上拝彦火々出見尊御陵」「又（御陵東接高千穂峯）」。『陽明学』148頁29頁。大正10年12月1日。

中備故方谷山田球講述門人東備天岳岡本巍手録校訂「中庸講筵録」。『陽明学』149号19―20頁。大正10年12月1日。

山田準稿「岡本巍君略伝」。『陽明学』149号27―30頁。大正10年12月1日。

中備方谷山田球講述門人東備天岳岡本巍手録校訂「中庸講筵録」。『陽明学』150号13―24頁。大正11年1月1日。
山田済齋準「水火和合歌贈金森毅庵君」。『陽明学』150号32頁。大正11年1月1日。
山田済齋輯「佐藤一齋ト丸川松隠墓碑銘」。『陽明学』150号33頁。大正11年1月1日。
「林述齋書簡山田家蔵」。『陽明学』150号34頁。大正11年1月1日。
「松崎慊堂書簡山田家蔵」。『陽明学』150号34頁。大正11年1月1日。
三島雷堂「王陽明と陶淵明」。『陽明学』151号4―6頁。大正11年2月1日。
中備方谷山田球講述門人東備天岳岡本巍手録校訂「中庸講筵録」。『陽明学』151号12―16頁。大正11年2月1日。
山田済齋「旭光照波」。『陽明学』151号29頁。大正11年2月1日。
中備方谷山田球講述門人東備天岳岡本巍手録校訂「中庸講筵録」。『陽明学』152号19―26頁。大正11年3月1日。
山田済齋「拝彦火々出見尊高屋山陵于大隅。御陵頗有異説。證之古事記。曰在高千穂山之西。一句鉄案。昨歳皇儒儲手裁銀杏樹」。『陽明学』152号31―32頁。大正11年3月1日。
三島雷堂「事上磨錬に就いて（去年十一月二十日至道庵で開きし講演筆記）」。『陽明学』153号5―7頁。大正11年4月1日。
中備方谷山田球講述門人東備天岳岡本巍手録校訂「中庸講筵録」。『陽明学』153号16―28頁。大正11年4月1日。
山田済齋「陞勅任之遇。窃賦此言志。二首」。『陽明学』153号36頁。大正11年4月1日。
中備方谷山田球講述門人東備天岳岡本巍手録校訂「中庸講筵録」。『陽明学』154号15―23頁。大正11年5月1日。
中備方谷山田球講述門人東備天岳岡本巍手録校訂「中庸講筵録」。『陽明学』155号18―21頁。大正11年6月1日。
中備方谷山田球講述門人東備天岳岡本巍手録校訂「中庸講筵録」。『陽明学』156号20―28頁。大正11年7月1日。

山田済齋「岩崎谷　西郷南洲終焉之地」。『陽明学』156号24頁。大正11年7月1日。
済齋山田準「浩然亭口占」。『陽明学』158号18頁。大正11年10月1日。
山田済齋「蘇子赤壁前游之夕同人雅集賦此」。「東正堂君過宿惺軒博士京都寓邸。有唱和詩。博士寄示。乃借博士天泉会詩韻。賦呈両賢。」『陽明学』160号22頁。大正12月1日。
山田済齋「高瀬惺軒君與安藤青木曽田諸子創天泉会于京洛。曰。会名取子糺林清泉。不必本于天泉證道。有詩見似。次韻寄懐。二首。」。『陽明学』163号19頁。大正12年3月1日。
門人江藤孝本稿三島雷堂寄贈「村上作夫先生履歴覚書」。『陽明学』164号22—26頁。大正12年4月1日。
山田済齋「鹿児島雑詩（三公銅像・浩然亭）」。『陽明学』164号27頁。大正12年4月1日。
門人江藤孝本稿三島雷堂寄贈「村上作夫先生履歴覚書」。『陽明学』165号22—26頁。大正12年5月1日。
済齋山田「鹿児島雑詩（甲突川・桂庵禅師墓・岩崎谷・俊寛港・松原神社・月照墓・琉球人松）」。『陽明学』165号24—25頁。大正12年5月1日。
門人江藤孝本稿三島雷堂寄贈「村上作夫先生履歴覚書」。『陽明学』166号22—23頁。大正12年6月1日。
門人江藤孝本稿三島雷堂寄贈「村上作夫先生履歴覚書」。『陽明学』167号17—21頁。大正12年7月1日。
三島雷堂稿「呈東正堂先生書」。『陽明学』169号15頁。大正12年12月1日。
山田済齋「地震行」。『陽明学』169号16頁。大正12年12月1日。
山田済齋「二松学舎学長三島雷堂君薦事。賦奠。」「杉浦梅窓先生薦事。賦奠。次去年誕辰先生詩韻」「又奠」。『陽明学』173号19頁。大正13年6月1日。

山田済齋「迎伯姉馬関」。『陽明学』177号24頁。大正14年2月1日。
山田済齋「陽明学と西郷南洲翁（講演筆記）」。『陽明学』181号1―6頁。大正14年10月1日。
山田済齋「陽明学と西郷南洲翁」。『陽明学』182号1―5頁。大正14年12月1日。
「『陽明学精義』予約出版」「本書は山田済齋（準）先生ガ七高造士館教授ノ傍明治四十一年王学会ヲ創メ本年迄十九年ニ於ケル陽明学講究ノ結晶ナリ「系統」「教義」「羽翼」ノ三門ニ分チ説キ来リ説キ去リ平易親切綱張リ目挙リ斯学ノ精義大旨ヲシテ一目ノ下ニ瞭々タラシム真個東洋哲学ノ粋、修養ノ好指針、思想悪化ノ現時ニ於テ敢テ此好書ヲ推称スベク予約法ヲ取ルコト左ノ如シ。（中略）。大正十五年八月。鹿児島市東千石町八十四番地佐々木直介方。鹿児島王学会。」『陽明学』186号巻末広告。大正15年8月1日。
「『陽明学精義』予約出版」。『陽明学』187号巻末広告。大正15年10月1日。
山田済齋「留別薩中諸友。余近日将退職東上也（四首）」「留別造士館諸生」「余将上京承乏二松学舎学長。有作」。『陽明学』189号22―23頁。昭和2年2月1日。
山田準「修養の鍵」（渋沢事務所陽明全書講読会講話筆記）。『陽明学』193号1―4頁。昭和2年10月1日。
山田準「陽明先生と大久保甲東翁に就て」。『陽明学』195号（最終号）1―13頁。昭和3年2月1日。
○石崎酉之允主幹『陽明』（大阪陽明学会）（60号以下通巻号。84号以下『陽明主義』に改名）
山田準「山田準先生書簡」（石崎東国宛、7月7日発、鹿児島山田準（造士館高等学校））。『陽明』2巻2号8頁。明治44年8月5日。
山田準「賀正」。『陽明』2巻8号8頁。明治45年2月5日。

七高教授山田準「誠意」。『陽明』2巻12号5頁。明治45年6月5日。
七高教授山田準「誠意」。『陽明』2巻13号2頁。明治45年7月5日。
済齋山田準在薩摩「餞第七高等学校第九回卒業生」。『陽明』2巻13号6頁。明治45年7月5日。
宮内黙蔵「今茲二月二十一日、嫡丁方谷山田先生誕辰、二松学舎長三島雷堂、嘱余使演説先生道徳、余乃口演其所懐一二杜責詩以紀之」。『陽明』3巻8号4頁。大正3年9月5日。
山田方谷「詠梅花」。『陽明』4巻3号2頁。大正4年4月5日。
鹿児島造士館高等学校教授山田済齋準「朱子晩年定論（上）」。『陽明』4巻5号1頁。大正4年6月5日。
山田準識「文法百則跋」（大正四年夏）。『陽明』4巻8号4頁。大正4年9月5日。
山田準「山田老兄より」（9月4日鹿児島）。『陽明』4巻9号4頁。大正4年10月5日。
鹿児島山田準「東澤潟『読並木栗水朱陸太極論合編有感。懐楠碩水。賦似諸子』後記。」。『陽明』4巻10号4頁。大正4年11月5日。
方谷山田球「失題」。『陽明』4巻10号4頁。大正4年11月5日。
山田準撰「報徳美談の序」。『陽明』5巻2号1頁。大正5年3月5日。
鹿児島山田済齋「丙辰歳旦」。『陽明』5巻2号4頁。大正5年3月5日。
（東京）三島毅「軽雲外山修造君墓碣銘」。『陽明』5巻7号2頁。大正5年8月5日。
山田芳（方）谷「中秋対月有感」。『陽明』5感8号1頁。大正5年9月5日。
鹿児州山田準『新納時升翁伝』。『陽明』5巻11号4頁御寄贈書籍。大正5年12月5日。

山田方谷「戊午元旦」。『陽明』60号20頁。大正6年1月5日。
済齋山田準「丙辰歳晩書懐」。『陽明』61号40頁。大正6年2月5日。
三島中洲翁米寿の賀会。『陽明』65号20頁。大正6年6月5日。
山田準「陽明学研究に就て」。『陽明』68号10—13頁。大正6年9月5日。
三島毅「岡村閑翁齢九十一見贈賀詩賦此以謝」。『陽明』68号27頁。大正6年9月5日。
三島復・高瀬惺軒「『我国の徳育と孔子教』に就ての問答」。『陽明』69号7—9頁。大正6年10月5日。
山田準「欧陽南野と其教語」。『陽明』69号10—12頁。大正6年10月5日。
山田芳（方）谷「山田芳（方）谷先生書簡」。『陽明』69号20頁。大正6年10月5日。
山田済齋「山田済齋兄より」（9月25日発）。『陽明』69号27頁。大正6年10月5日。
山田済齋「山田済齋兄より」（10月2日夜）。『陽明』70号27頁。大正6年11月5日。
山田準識「方谷子書牘附記」。『陽明』70号27頁。大正6年11月5日。
鹿児島山田済齋準「東遊唱和詩篇」。『陽明』71号26頁。大正6年12月5日。
八十八老人三島中洲毅「山田済齋来訪有詩次韻以謝」。『陽明』71号26頁。大正6年12月5日。
済齋山田準「丁巳夏訪荘田翼齋君于東京青山之寓。拝先師霜渓先生霊牌賦奠。代蘋繁。余従遊先生于備中高梁有終館三年」。『陽明』71号26頁。大正6年12月5日。
山田準「丁巳夏東上。途訪郷先輩足立芳里翁于神戸。賦呈。五愛楼。為備中我旧松山藩儒奥田楽山先生隠棲吟哦之處」。『陽明』71号27頁。大正6年12月5日。

山田済齋鹿児島「昨冬移居北隣西郷南洲翁宅跡有誕生碑賦之録粲」。『陽明』73号26頁。大正7年2月5日。

山田済齋「春日潜庵翁と山本権兵衛」。『陽明』76号18―19頁。大正7年5月5日。

山田済齋「東京荘田翼齋吹野聴雲唱和有作遠寄索和次韻」。『陽明』77号24頁。大正7年6月5日。

三島復「陽明学研究跋文」。『陽明』78号23頁。大正7年7月5日。

山田準「山田準氏より」(11月23日鹿児島にて)。『陽明』83号25頁。大正7年12月5日。

山田準「鎌田柳泓と心苑餘材―附たり柳泓と羅近渓の学風―」『陽明主義』84号19―21頁。大正8年1月5日。

山田済齋「寄但馬池田君君草庵先生後嗣今茲罷官再興青渓書院」「薩藩嘉永殉難志士祭典賦呈野村山人翁」。『陽明主義』84号28頁。大正8年1月5日。

山田準「薩中展伊東潜龍墓于玉龍山下、潜龍絶命詞云、安陀志野之露登消天毛明計伎玉乃臺波光佐須良牟」。『陽明主義』88号28頁。大正5月5日。

倉田何庵・三島中洲二先生追悼会(一月十八日例会後)。『陽明主義』89号26頁。大正8年6月5日。

(90号―95号欠)

薩摩山田準「新年所感」。『陽明主義』97号31頁。大正9年2月5日。

山田済齋準「悼岡村閑翁先生(二首)」。『陽明主義』98号24頁。大正9年3月5日。

何庵倉田績先生遺詩「上洗心洞、賡畏友三島中洲博士詩韻。」(東国云中洲博士詩韻、即陽明洞詩碑也時、去年三月十六日當本会例講、則為何庵先生最後之上洞、而書此詩賦于余、蓋先生之絶筆也)。『陽明主義』101号4頁。大正9年6月5日。

三島復「謹録王陽明語以為弔見山中熊君辞」。『陽明主義』101号29頁。大正9年6月5日。

三島復「故倉田先生談片」『陽明主義』102号9—11頁。大正9年7月5日。
「山田方谷先生筆蹟」（会員青木重斌氏蔵本）。『陽明主義』105号巻頭口絵。大正9年10月5日。
山田準「題大塩中齋先生書幅西薩萩原笛村所属」「祖翁方谷長瀬宅地碑成賦謝諸君子」。『陽明主義』106号26—27頁。大正9年11月5日。
三島中洲「訪藤樹書院」。『陽明主義』111号28頁。大正10年4月5日。
高瀬惺軒「方谷先生幼にして敏慧なり」（「餘姚清談」所収）。『陽明主義』114号5頁。大正10年7月5日。
山田準「薩軍突破の可愛嶽」。『陽明主義』117号21—22頁。大正10年10月5日。
山田済齋「陽明先生彫像成。與王学会諸子。設壇礼拝。賦奠」。『陽明主義』136号18頁。大正13年3月25日。
山田済齋「塔尾陵下感懐」「喜蔵院感懐」。『陽明主義』147号（最終号）26頁。大正14年9月25日。

附記　近代日本における漢学者・陽明学者・朱子学者に就いては、例えば研究者として顕著な業績を残して著作集・全集が刊行されている、例えば内藤湖南・狩野直喜・津田左右吉・武内義雄・青木正児などを例外とすると、それ以外に就いては書誌的な調査は殆ど成されていないのが現状である。近い過去であるがために研究の対象になりにくかったという事情が働いていたであろうが、明治・大正・昭和前半期はもはや歴史的には歴然とした過去である。西欧の近代的学問、或いは「近代思想」が日本に押し寄せてきた後に、伝統的な漢学を基礎教養とする、所謂漢学者が如何なる対応をしたのかを客観的に検証する時期に今はあると思われる。１９４５年以後の時期に、漢学、特に中国哲学は根本的に自信喪失した経験がある。「大日本帝国憲法」下で「滅私奉公」的思考に馴らされて自前で考えてこなかった事が、特に

中国学の分野では顕著であった。この時代をかいくぐってきた先輩の世代の人の中には、このような断罪に立腹される方があるかもしれない。今でも自前で考えることなしに、時流の中で牽強付会を平然と行い、時代思潮に迎合して論陣を張る徒輩が跡を絶たないのであるから、この時期の所謂学者をのみ批判するのは、平衡を失した立論であるとお叱りを受けるかもしれない。そのことを承知の上で、日本近代における中国学、あるいは中国学の哲学遺産は、結局の所、何であったのかを、そろそろ冷静に検討しても良い時期ではあるまいか。我々が従事している中国哲学とは近代日本においてはいかなる意味を持ったのか、アカデミズムを越えて包括的に商量することが、要請されているのではないのか。日本は歴史時代の当初から漢字文化圏の中で展開してきた。その関係は時代を経るにつれて密度を益してきた。されば実は今こそが最も親密な関係にあるともいえる。この関係がごく近い過去においてはいかなる意味を持ったのかを、一般論としてではなくして、個別的事象に即して検証する作業が緊要であろう。この作業は実は日本に留学して在日のまに日中の学術思想の交流を研究している若い研究者によって顕著な成果が挙げられている。この業績はありのままに評価されることを期待する。その作業を日本側から「二松学舎」という一高等教育機関に奉職した人々に焦点を合わせて、その初歩的作業として、彼らが所見を発表した一部の機関誌に即して調査した、その結果を報告したのが本稿である。ささやかな報告である。しかし、この種の調査報告の蓄積が今は必要なものと考えて公表した次第である。ここに取り上げた所謂陽明学者たちは、ここで調査した発表機関誌以外にも、予想以上に様々な機関誌に発表している。それらをも調査してそれらをみわたしたうえで、この時代の漢学者達の営為を鳥瞰して、その意味を考えてみることにしたい。その意味では、この報告はささやかな「はじめの一歩」である。大方のご助言をお願いする次第である。

（東洋大学文学部教授）